日本聖書協会×キリスト新聞社
第１回 聖書エッセイコンテスト

大賞
「父の遺言」　見澤 富子

「読書が好きだ。読書と言っても小説とか漫画とかじゃなくて、聖書を読むのが好きだ。朝から聖書を読んでいると「なんだ。試験勉強じゃないのか」とガックリ肩を落とす。母の残念そうな顔が好きだ。途中トイレに行けば「門をたたきなさい。そうすれば開かれる」と兄がマタイによる福音章の一節を引用する。そんなお茶目なところも好きだ。メイク中の姉に「今日も目がキレイだね」と言うと「人の長所ばかりを見てるからね。目が澄んでいれば全身が明るいんだよ」と聖書の一節を引用しつつ、アイラインをグッと引く。あの得意顔も好きだ。
そんなわが家も十一年前。震災ですべてを失った。家は津波で流され、大切な父も流された。いくら探したかもわからない。いくら泣き叫んだかも。あの時の津波のしょっぱさは、きっと、涙の味だった。
だけど奇跡は起きた。震災から二週間後。瓦礫の中から父の聖書が見つかった。これは生前父がよく読んでいたもの。何だか父の里帰りみたいで胸が熱くなった。
「ノアの大洪水の後、もうしないよって約束の証に主が虹をかけたんだよ」
父は私によく聖書の話をした。私が「じゃあ虹は笑顔の証拠なんだね」と言うとやさしく微笑んだ。
いま懐かしい思い出を胸に、どうしても父を奪った津波が『ノアの洪水』と重なってしまう。怒りや哀しみ。どうしようもない気持ち。もちろん、ある。それでもここに父の聖書が残る意味は、きっと、ある。これは父の遺言であり、愛のメッセージ。
「何かあったら聖書を読んでごらん。きっとチカラが湧いてくるよ」
天国からささやく父の声が聴こえた気がした。
それからというもの皆で聖書を読むようになった。避難所の生活に疲れた日。電気を止められた日。進学の夢を断たれた日。いつでも聖書は私たちと共にあった。苦しい時でも聖書を読むと勇気が湧いてくる。虹の前には必ず雨があるように、雨のような涙を流したって、いつか虹のような未来が待ってる気がした。
先日のお墓参りは雨だった。帰り道、空に上がる虹を見て「きっとパパが喜んでるのね」と母が笑う。この時の笑顔がものすごく好きだ。
読書も、聖書も、家族こそ好きだ。これからも私たち家族は『聖書』と共にある。聖書を通じて父を傍に感じられたらいいし、笑顔になれたら、もっと、いい。そんなことを考えるのが今は一番好きだ。」

「私につながっていなさい」
　吉國 選也

私が小学四年生のとき、母が病に倒れた。父は早くに天に召され、母は女手ひとつで私たち兄妹 4 人を育てていた。「母子家庭だから」と後ろ指を指されたくない、そう思って無理を重ねていたのだろう。母の顔は日に日に土気色になっていく。やっと医者に診てもらった時には、一刻も早く胆のう摘出手術をしなければ命の危険さえあると言われた。身寄りの少なかった私たちはそれぞれ、親戚や篤信なクリスチャンの友人に別々に預けられることになった。
私は同じ教会に通う教会員のご家庭に預けられた。歳の近い子どもたちが住んでいたこともあり、最初の数日こそ楽しく過ごしたが、しょせんは肩身の狭い居候生活である。他人の善意に甘えていることは幼心にも理解していたので、やがて全てに遠慮がちになった。ひと月、ふた月が過ぎても母は退院する気配がない。このまま家族が離れ離れになるのではないかという漠然とした不安が、重く心を覆っていった。
そんな私を見かねてか、ある時おばさんが自分の好きな聖書の箇所を教えてくれた。
「私はまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である。」「私につながっていなさい。」「その人は実を豊かに結ぶようになる。」
現実は家族がバラバラになり、明日どうなるかもわからない境遇だった。そんな自分に「私につながっていなさい」と語りかけるその言葉。心地よい旋律のような響きは私の脳裏に刻み付けられた。しかし、それが聖書のどこに書いてあるのか、その時はおばさんに遠慮してついに聞くことが出来なかった。
それから程なくして母は退院し、幸いなことに私たち家族はまた一緒に暮らすことができるようになった。血色の戻った美しい母の頬っぺが嬉しかったのを覚えている。
わが家に帰った私は、学習机に立て掛けてあった自分の聖書を、ほとんど初めて自分の意思で開いた。あの言葉はどこに書いてあるのか。パラパラ漫画の落書きが端に描いてある聖書のページを、漫画には目もくれずにめくっていった。
学校帰りの午後、数日を要したと思う。族長アブラハムの物語が終わり、私と同じ名前の預言者エリヤの物語も過ぎた。イザヤ書の預言の言葉がなんとなく似ていて、読み落としたかともう一度読み返したがあの言葉は書いていなかった。
そしてついにイエス様の物語である「ヨハネによる福音書」の中に、その言葉を見つけた。小声で声に出してその箇所を読み、それから声を押し殺して泣いた。その言葉を言ったのは・・・十字架刑で殺される直前のイエス様だったのだ。「私につながっていなさい」。この聖なる御言葉はその時私の一部になった。
あれから時を経て、言葉の力を信じる者になった私は本屋のオヤジになった。それも聖書を売っている特別な本屋だ。私は今日もお客様を心からお迎えしている。あの時の可哀想だった自分を救ってくれた「聖書」の言葉を、今は手渡す人になっているのだから。